



二
月

パストラル尼崎

如
月

No.117.2022(R4)年1月25日

〔編集・発行〕

パストラル尼崎

尼崎市潮江1丁目10-2

Tel.06-6493-0521

Fax.06-6493-0301

発行責任者：峰田 康弘

◆2月の歳時記◆

「ふしなご」

2月10日は「ふとんの日」だそうです。ひと昔前は何処の家も重い綿布団が定番で、各家庭の主婦がへたった綿の打ち直しをする光景がよく見られたものですが、いつの間にか羽毛布団が登場し、今では健康志向の高反発やら低反発やら、高級な布団が出回るようになりました。

さて日本人はいつからこんなに豪華な布団で寝るようになったのでしょうか。実は、平安時代は貴族であっても敷布団はなく、床に「むしろ」を何枚か重ねただけの『八重畳』でゴロンと寝ていました。名前だけは優雅ですが掛布団もなく、肩間着ていた着物をかけただけのお粗末さ。一方、庶民といえ、わらに潜って寝たりと殆ど動物並み。パジャマも無く基本、裸だったそう。泣。その後の鎌倉、室町時代になっても、上流階級でさえ布団はなく畳の上に着物が定番の寝具だったようです。

しかし戦国時代になると木綿の栽培が全国的に広がり、ついに綿を詰めた敷布団が登場します。また掛布団も夜着（よぎ）と言われ、寒い地域で今も見られる着物（かいまき）の形が登場。そして江戸時代末期には一部の武士や町人も綿の四角い敷布団が使われるようになります。その頃の綿布団の値段は今の高級車並み。なので庶民は「天徳寺」と呼ばれる和紙でできた掛布団や農民は相変わらずの「むしろ」で寝ていました。庶民が綿布団で寝られるようになったのは意外と近年で、明治半ば以降だったようです。

例外といえは吉原の花魁たち。豪華絢爛な絹布団を三つ重ねた布団は「三つ布団」と呼ばれ、その枚数は彼女たちのステータスとなっていました。江戸屈指の呉服店、越後屋で特注すると一千万もしたそう。馴染み客にプレゼントされた「三つ布団」は軒先に「積夜具」（つみやぐ）として大々的にお披露目されたそうですが、下級クラスの花魁たちの嫉妬や羨望の眼差しが目に浮かびそうです。汗



昭和30年頃の「わら布団」を作る主婦

⑧「やらと」さんの話



今年寅年と言う事で、和菓子の老舗「とらや」さんの事を少し…。「とらや」といえば、羊羹“夜の梅”が有名ですね。あの黒地に金の虎の紙袋も、その格式の高さを際立たせています。看板も何故か頑なに右から読みで・・・汗 京都発祥であるにも関わらず、番重に並ぶ手頃な和菓子が飛ぶように売れている滋賀発祥「たねや」さんや「叶匠寿庵」さんのような関西のノリはありません。しかしその歴史を知ると納得です。室町時代から天皇家とは特に関係が深く、財閥、実業家、作家、俳優など多くの時の権力者や文化人に愛された「とらや」は日本を代表する別格の存在でした。古文書や菓子の見本帳など価値ある資料も多く、それらを集めた資料室「虎屋文庫」まであります。

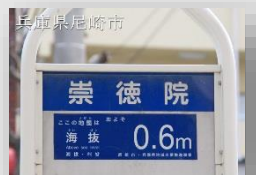
しかしそんな「とらや」さんも天皇家が東京に引っ越す際、大きな決断に迫られます。きっと御所御用で安泰だった店の存続に関わる一大事であったに違いありません。12代光正は、京都に店を残しながら東京にも進出する決断をします。既に東京には将軍家と親しい菓子屋があったはずで、新しい環境での経営は容易な道のりではなかったでしょう。でも今では、直営店の店舗数はダントツで関東が勝っています。

（関西人には寂しい限りですね。）「とらや」には昔から創業家の人間が入社できるのは1代に1人という不文律があり、今は18代の黒川光晴氏が社長を務めています。余談ですが、光晴氏の奥様はなんとインドと日本のハーフだそうですよ！

尼崎市内の海拔は？...

尼崎市の海拔といえば「0m」と言われる事が総じてありますが、その中にはマイナスの場所もあれば10mを超えるところもあります。各地点で以下のような差があることがわかりました。ご参考までに。

- ・大物駅 -1.4m
- ・杭瀬駅 -1.3m
- ・出屋敷駅 -1.2m
- ・阪神尼崎駅 -0.9m
- ・尼崎センタープール前駅 -0.4m
-
- ・JR尼崎駅 0.7m
- ・尼崎市役所 2m
- ・武庫川駅 2.1m
- ・立花駅 2.9m
- ・園田駅 3m
- ・阪急塚口駅 3.4m
- ・尼崎医療生協病院 4m
- ・武庫之荘駅・園田競馬場 5.2m
- ・猪名寺駅・つかしん 8.9m
- ・産業技術短期大学 13.1m



1番低い地点は大物駅、1番高い海拔は、産業技術短期大学でした！